無敵スライム

算裏　友城

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
無敵スライム

【Ｎコード】
Ｎ２００４Ｘ

【作者名】
算裏　友城

【あらすじ】
最弱のモンスターはなんだろう？　その問いかけに人々が声を揃え答えるのは、決まってこう、“スライム”だ。
だが、もしも最弱代表たるスライムが最強の力を持っていたとしたら……。
無敵シリーズ第四弾、無敵スライム、開幕！

第一ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　パーティー昇龍のリーダー

この世界において、“最弱モンスター”との烙印を押されているのは如何な存在か？

ある酒場にて一つのパーティーからあがった、ツマミついでの議題である。

彼らはどうやら難所とされるダンジョンを攻略し、上機嫌で打ち上げをしていて初心者語りから派生して来た話らしい。

リーダー格の熊を思わせる隻眼の大男が、“俺の前ではモンスターなぞ等しく雑魚だ”等と酒のせいもあり大きく出れば、切り込み隊長の剣士が“最弱っつったらボーッつっ立ってるだけのナマケモンキーだろ”と言う。

しかしすかさず賢者が、いや、と否定し“自分的にはウォルオウィプスの類いだ”と述べる。最後に女魔法使いが“デッドリーフに決まってるじゃない”と反論した。

「何言ってんだよお前ら、ナマケモンキーはな、攻撃を受けない限り何もしてこないだろうが！　急所を一突きだね。間違いなく奴だ！」

「しかしですね、仕損じれば手痛い反撃がありますよ。群れているようものなら中級者と言えどてこずる恐れがあります。その点、初歩的な浄化術で簡単に駆逐出来るウォルオウィプスこそ最弱かと」

「オバケ嫌いな人はどうなのよ！　デッドリーフなら、枯れてる

しちょっとした炎で凄く燃えちゃうのよ。アイツでしょ？」

ヒートアップする議論。このまま閉店まで騒がれてもたまらぬリーダーは、まぁまぁ待て待て、と皆を諌めつつ言う。

「おめえらはな、自分の立場でモノを言い過ぎなんだよ。よぉく考えてみろや……動きが鈍く、痛えのもなく、群れず、駆逐も容易で魔法もよく効く、そんな雑魚中の雑魚がいるじゃねぇか」

「おいおいリーダー、俺は敢えてそいつを避けてたんだぜ？　どんな初心者でもそいつは倒せらぁ」

「右に同じく。下手をすれば私の息子でも倒せるでしょうね。因みに今年で六つですが」

「えっ、えっ、何？　そんなの居たっけ？」

未だ気付かぬ勘の悪い魔法使いに、賢者はそっと耳打ちをした。

ああ、と得心のいった表情を浮かべる魔法使い。そして皆はいっせーの、せでモンスター名を叫んだ。

「「「「「スライム！」」」」」

と。スライムとは、最早冒険者らにとって周知のお馴染み最弱モンスターである。

大概は大きさにして二十から三十カラム前後（約二十から三十セ

ンチ）、子供の蹴球遊びに使用されるボールよりも一回りから二回り位大きい程。

地方によって違いはあるがゼリー状で非常に軟らかく、海水の様に無色透明に微かに青みを含ませた色合いのモンスターである。

よく、打撃や剣はその性質やイメージから通用しにくい、と言われるが実際には水分を内包している表皮を破ってしまえば勝手に崩壊する……そんな程度のキングオブザコ。

子供がボール代わりに蹴っていたら死んだ、とかの話も有名でよく聞く。

生まれ変わりたくない生物ランキングでは、恐らくダントツの一位を飾るであろう気の毒な生き物である。

だが……これから先そんな認識が通用しなくなる事を、誰も知らなかった……。

あれは酒場の閉店間際。例の四人パーティーが店から出て宿へと向かっている頃だった。

彼らが宿泊するのは、ガロスの宿。初級冒険者らはテントの中から眺め、中級冒険者は財布を見て諦める、そんな宿である。

賢者に肩を支えられフラフラとおぼつかない足取りで歩く剣士。妙なテンションで奇妙な歌を口ずさみ魔法使い。

そしてリーダーといえば“ちょっと小便に行って来る”と言い、

あろうことか町外れの草むらへと走って行ってしまったのだ。

これまた陽気に故郷の歌を口ずさみならぬ鼻ずさみ、丁度背高なフレリーフの木の裏へと回り込む。さて、用を足そうかと思ったその時であった。

ガサッ、と草むらが揺れ動く。

「！？」

が、彼は腐ってもパーティー“昇龍”のリーダーであり、この道二十ウン年のベテランである。

即座に視線を音の方向へ向け、付近に耳をすませ迎撃体勢をとった。流れる様な一挙一動に隙はない。

物音の正体は直感的にモンスターである、と認識。彼はあれこれと既に思考を巡らせていた。

町のそばだからと完全に油断していた。武器は宿に預けていて手元にない。この辺りならばウルフか、あるいはポイズンスネークか……いずれにしろ素手でやり合えるか？　酔いが回っているし……。

ガサ、ガサと草むらは不気味に揺れ、敵の接近を伝える。僅かな洩れ灯りを頼りに彼はその方向をじぃっ、と凝視した。

それは思ったよりも小さくて……。

「えっ……？」

子供の遊具を二回りも大きくした、球状の、きらきらと僅かな光を弾くボディ。彼は途端に緊張状態から解かれた。

「ナンだよ……スライムじゃねぇか！」

大方道に迷ったのか、たまたま街の近くに現れたのだろう。取り立てて珍しい事でもない。

さて正体も分かったところで、一瞬でも自分を恐怖させたちっぽけなそれを、リーダーは許す事が出来なかった。

そうだ蹴りでもくれてやろう、そう思い再び雑魚を視界に収め……。

（あん？　どこ行った……？）

しかしスライムは忽然と姿を消した。いや、違う、正確にはリーダーの背後に素早く回り込んでいたのだ。

ベチャァァァァ！

「ぐぅあああああああああああああああああああああああああああああああああ！？」

パーティー昇龍のリーダー、ブレッドに勝利した。

……翌日、ブレッドは瀕死の状態で発見され、教会の世話になったという。

彼は、何に襲われたのかを、誰にも語る事はなかった。

第二ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　新人パーティーひまわり（戦士Ｌｖ．１　×　２）

「な、なぁ、ボクたち　だいじょうぶだよな？」

ひまわりの　リーダーは　いった。

「だ、だいじょうぶさ　たびだつまえに　かわのよろい　をかっただろ？」

ガサッ……

「ひっ　モ、モンスター！？」

モンスター　スライムがあらわれた

「な、なんだよ　スライムじゃないか　こんなやつ　さっさと……」

バシッ！　ピシャッ！

「「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああああああああああー！？」」

パーティーひまわり　にしょうりした。

第三ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　新米勇者マット　（勇者Ｌｖ．２）

「いよっしゃぁ、らくしょうらくしょう　このちょうしで　すすむぜ！」

ガサッ……

「ん？」

モンスター　スライムがあらわれた

「いまさらかよ！　いいぜ　しんわざを　ためしてやる　いくぜぇぇ！」

ベチィッ！

「ぐぶうう！？」

しんまいゆうしゃ　マット　にしょうりした

第四ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　初級者ウィザード　リリィル　（ウィザードＬｖ．３

「あぁ　こまったわ……　まほうつかいすぎて　ＭＰ（マジックポイント）カラッポ……」

ガサッ……

「えっ　ちょ、こんなときに！？」

モンスター　スライムがあらわれた

「な、なーんだ　アンタなんか　つえの　だげきいっぱつで……」

ズドッ！

「きゃああー！？」

しょきゅうウィザード　リリィル　にしょうりした

第五ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　なりたて拳士ダベッカ　（拳士Ｌｖ．４）

「よしっ　あといったいだ　あといったいたおせば　ゴールドがたりて　あたらしいグローブ　かえる！」

ガサッ……

「きたぁぁぁぁ　かねをだせぇぇぇぇ！」

モンスター　スライムがあらわれた

「ウソだろっ！？　いっせんにも　ならない……」

グバッ！

「う、ウオオオオォォーー！？」

けんしダベッカに　しょうりした

第六ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　商人見習いシンゴ　（商人Ｌｖ．５）

「まったく　はやくほかのメンバーを　あつめないと　そざいもあんしんして　ちょうたつできません」

ガサッ……

「なっ　モンスターですか！　ここは　けむりだまでにげ……」

モンスター　スライムがあらわれた

「あぁ、なんだ　おどろかさないでくださ……」

ビチャァァッ！

「なんですとォォオー！？」

しょうにんみならい　シンゴに　しょうりした

第七ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　迷子勇者セイン　（勇者Ｌｖ．？？）

「うーん　あくましてんのうを　けちらしたはいいんだけど　…
…ここどこだ？」

ガサッ…

「！？　そこだ！」

セインは　ドラゴンスライサーを　はなった

ズバッ！

モンスター　スライムは　まっぷたつになった

「っと　スライムだったのか　ごめんな　ものすごい　さっきを
かんじたから　……って、スライム！？　まさか　ボクのこきょう
ちかくまで　もどってしまったのか！？」

セインは　あわて　はしりさった

ズル……ズル……

ピチュッ……

スライムは　くっついて　さいせいした

第八ゲル　無敵S　VS　野生モンスタートロール（獣人Lv.6）

「ニンゲン　タオシタ　オレ　イマ　イイキブン」

グチャ……

「ン……？　アアッ　ツイテネエ　スライム　フンヅケチマッタ！」

ドスドスドスッ！

「ギ、ギヤアアアー！？」

モンスター　トロールにしょうりした

第九ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　ひよっこ剣士マグナ　（剣士Ｌｖ．７）

「ちくしょう、ちくしょう　なんだよアイツら！　ボクだってウルフまでなら　たおせるんだ　こどもだからって　バカにするな！」

ガサッ……

「なんだよ　モンスターか！？」

モンスター　スライムが　あらわれた

「タイミングわるかったな　ボクはいま　きがたってるんだ！くらえぇぇー！」

ビシィィッ！

「うっ、うわあああー！」

ひよっこけんしマグナに　しょうりした

第十ゲル　無敵S　VS　ベテランパーティー昇龍リーダー　ブレッド　（重

スライムがあらわれた

「どりゃぁ！」

バシャ……

スライムがあらわれた

「ぬォォォ！」

ベジャ……

「おい　……リーダーさ　なんでスライムばっか　かってんの？」

「このあいだの　いっけんいらいですね」

「あんがいおっちゃん　スライムに　やられたんだったりしてー」

ガサッ……

スライムが　あらわれた

「きさまで　３３たいめだ　かくごォォ！」

バシィッ！

「ぎゃあああああああああああああああー！？」

ブレッドに　しょうりした

「「「リーダー！？」」」

第十一ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　パーティー昇龍残りメンバー　（重剣士　賢者　炎

「なんだコイツ　リーダーを　いちげきで！」

「ただの　スライムでは　ありません　ステータスじょうほうが
いっちしない」

「おっちゃんを　よくも！」

「くらえぇぇ！」

じゅうけんしは　マグナスラッシュを　はなった

「しかたありませんね！」

けんじゃは　スターライトを　しようした

「わがほのおよ　てきをやきつくせ！」

ほのおのまほうつかいは　プロミネンスを　しようした

ビシッ　ドカッ　ベチャ

「ぐぁ　あぁ……」

「ばかな……」

「こんなことって……」

パーティー昇龍に　しょうりした

第十二ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　パーティーアサシンアサルトのリーダー

「それじゃ……我らの功績を讃え……乾杯……」

それはまるで、絶望の最中執り行われた最後の晩餐の様であった。

もしくは雰囲気だけなら明日、魔王がやってくる辺境の村のそれだ……パーティー“アサシンアサルト”の打ち上げ会は。

「肉……うまい……」

「魚も……いい……」

ロボットの品評会か、あるいは狂信的儀式……さかも皆の格好が漆黒のコートであったり、深い帽子着用であったり……目と鼻元以外は徹底的に晒していない出で立ちが尚、不気味さを強調していた。

「……この度は……襲撃人数百人……達成……めでたい……」

リーダーのアサシンは、皆に対し虫の羽音程の声でボソボソと言った。

「おめでとう……」

「おめでとう……」

「めでたい……」

残りの仕事人三名が同じく呟く。

「だぁがしかぁし！　……ゴホン……ゴメン、興奮し過ぎた……我々以上に……襲撃を成功させているパーティーは……まだまだ居るだろう……そこで……明日から……クィクス大陸に……向かう……」

「「「クィクスに！？　……ごめん……キャラ作り、キャラ作り……」

「我らは……次のランクに……進むべき。それに……ここでは……名を知られ過ぎたし……潮時だと思う……」

「確かに……そうだ……」

「俺は……子供に石を……投げられた……」

「まだいい……ワタシは問答無用で……切り掛かられた……」

彼らの言うように、パーティー“アサシンアサルト”の悪名は、あまりに知られ過ぎてしまった。

基本的な活動といえば、汚い金持つ貴族やぼったくり商人などをターゲットに襲撃を繰り返し、金品強奪あるいは暗殺を行うという内容だ。

だが、それはれっきとした犯罪であるし悪の行いである。無論そんな彼らに対しては非難の声の方が大きい。敵の方が遥かに多いのである。

何故四人が汚名を着てまでこの道を突き進むのか……それは本人ら以外は誰も知り得ない事だろう。

さて、話を戻すが、実は彼らが九十九人目と百人目に選んでしまったターゲット……それがどうやら予想以上の有力者であった為に、名は派手に売れてしまい挙げ句大量の追っ手が投入されてしまったのだ。

そしてリーダーの発言、それは国外逃亡の意味を含んでいる。皆も無論、承知であったが口には出さなかった。

「だけど……それでも、それでも、我々は続けなければならない！　いつの日か我らの流した血が汗が、清浄なる世界へと繋がらん事を夢に見ながら！」

「「「リーダー！　キャラ、キャラ！」」」

「あ……うん、ごめん……とにかく……打ち上げはここまで……明日の、準備しよ……」

「あの……」

「まだ一杯しか……」

「いやむしろ一杯も……飲んでないけど……」

「あ……」

打ち上げは再開された。

「他に何……頼む……？」

・

「皆……お腹いっぱいに……なった？」

「うん……」

「はい……」

「ええ……」

「じゃあ……こっそり、帰ろう……さらば……」

「「「さらば」」」

四人はそれぞれ別々の方角に消えていった。内、リーダーは北の方角へ茂みに紛れ走り抜けてゆく。

速度を保っているにも関わらず、夜の静寂は乱れもしていない。が、その時だ、背後に何かを感じたのは。

（何か……居る？）

自分の後ろを影のようにへばりつき追って来る何かが、確かに居る。

（なら……）

と、リーダーは年寄りの木々に目を付けると、なんと幹を駆け登り、枝のしなりを利用して跳躍。

背高な木々を見下ろしつつ、クナイを取り出すと気配目がけ投てきした。四本四本、計八本のクナイが降り注ぎ、確かにその何かへ二発が命中した。

クルクル回転、その後音なく着地を決めると、リーダーは慎重に着弾地点へと向かった。

転がっているのは亡骸か、あるいは……だが、そこにあったのは、何と切り株であった。

「なっ……か、変わり身だと！？」

ガサッ……

「しまっ……！？」

モンスター　スライムがあらわれた

「えっ……？」

ばしいいいっ！

「きゃあああああああああああああああああああああああー！？」

アサシンアサルト　リーダー　クリスにしょうりした

第十三ゲル　無敵ＳＶＳ初心者パーティー　チューリップ　（戦士Ｌｖ．１

「なぁ　ボクたち　だいじょうぶだよね？」

チューリップのリーダー　はいった

「だいじょうぶ　ついさっき　はがねのつるぎ　と　てつのよろい　をかっただろ？」

ガサッ……

「な、なにかいる！」

「よし　いつでもこい！」

モンスター　スライムがあらわれた

「なんだよ　スライムじゃ……ん？　なんで　こんなところにスライムが……」

バシィッ！　ドスッ！

「「ひいいいいいいいいいいいいいいいいいいいー！？」」

パーティー　チューリップに　しょうりした

第十四ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　速射ちガット　（銃士Ｌｖ．１１）

「ふん　どんなモンスターも　おれの　はやうちには　かなわないぜ」

ガサッ……

「ん、そこだぁぁ！」

ガットは　はやうちを　しようし……

ベチャア！

「な、おれよりはやいだとオオオーー！？」

モンスター　スライムがあらわれた

ガットに　しょうりした

第十五ゲル　無敵S　VS　パーティー美女とケダモノ　（トレジャーハンター

「ちょ、ちょっとまって　おいてかないでよ！」

「うるさいな　なら　そのにもつを　へらせよ」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「このにもつは　わたしのせんりひんなの　ひとつたりとも　てばなせるわけないでしょ！」

「ならあしをひっぱるな　はやくあるけ　ペースをみだすな」

「なによー！」

「なんだよ！」

バチィッ　ベジャッ

「「ぎゃああああああああああああああああああああああー！？」」

パーティー　美女とケダモノ　にしょうりした

第十六ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　ビーストテイマー師匠と弟子　（獣使いＬｖ．３０

「ようしよし　レベルもあがったし　これでおまえも　りっぱな
ビーストテイマーだ」

「ありがとうございます　これでボクも……」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「むっ　ちょうどいい　あのスライムを　なかまにしてみろ」

「はい！　えっとまずは　エサをなげて……」

バチィン！

「うわあああああああああ！？」

「なんだと！？」

ビチャァッ！

「ぐあああああああああああああああああああ！？」

ビーストテイマー師匠と弟子に　しょうりした

第十七ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　買い物帰りの少年　（一般人）

「はぁ　はぁ　はやくかえらないと　くらくなっちゃう」

ガサッ……

「うっ……モ、モンスター！？」

モンスター　スライムがあらわれた

（モンスターにであったら　しずかに　しずかに……）

バサッ！

モンスター　ウルフがはいごからきしゅうを　しかけてきた

「！？」

ドスッ！

「きゃいいいいいいいいいん！？」

モンスター　ウルフにしょうりした

ガサッ……

スライムは　さっていった

「いったい　なにがおきたの……？」

しょうねんは　ぼうぜんと　たちつくした

第十八ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　依頼実行中の男クリフ　（レンジャーＬｖ．２０）

ドカッ

「グオオオオオオ！」

モンスター　ギガベアーにしょうりした

「よし　いらいたっせいだ　さっさとかえって　ほうしゅうにありつくか」

ガサッ……

「ん　なんだ？」

モンスター　スライムが　あらわれた

「スライム……？　よし　ついでだし　たおしてやる……」

バシィ！

「ぐぅあああ！？」

クリフに　しょうりした

「う、そだ……おまえは　いったい……」

バシィィィィッ！

「ぎゃあああああああああああああああああああああああー！？」

クリフに　しょうりした

第十九ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　盗賊の男　（盗賊Ｌｖ．２２）

「うぎゃあああー！？」

男に　しょうりした

「へへへ　……かねめのものは　もらっていくぜ」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「あぁん？　……いまいそがしいんだ　うせてな　あとで　あいてしてやるよ」

パァン！

「うぎゃあああー！？」

男に　しょうりした

第二十ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　双子魔法使いパーティー　デュアル　（氷魔法使い

「…………」

「…………」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「「フリージングスフィアー！」」

ピキピキ……

スライムは　こおりついた

「あとはくだいてしまって……」

「それでおしまい……」

ピシッピシッ……

「「えっ？」」

バキィッ！

「「きゃああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ

ああああああああああー！？」」

パーティー　デュアルにしょうりした

第二十一ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　ベテランパーティー昇龍リーダー　ブレッド

「ふぅ　きょうはここで　のじゅくだな」

「そうですね　テントは　わたしが　はりましょう」

「ごはんは　わたしつくる！　……ところで　リーダーは？」

「あっちで　すぶりしてるよ　……よほど　くやしかったみたいだな」

「ふんっ」

ブン

「ふんっ！」

ブン

「はぁぁっ！」

ビュン

「うおおォォォォ！」

ガサッ……

「でたな　そこかぁぁぁぁぁぁ！」

ドスッ！

「ぎゃあああああああああああああああああああああー！？」

パーティー昇龍リーダー　ブレッドに　しょうりした

第二十二ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　採掘兄弟　（採掘人Ｌｖ．２５）

「よっしゃあああああ　ついにレアメタルを　ほりあてたぞ！」

「ほんとか　やったな！　しかしこっちは　くずいししか　とれないんだが……」

カン　カン　グニッ

「ん？　なんだいまの……」

モンスター　スライムだった

ベチィィィッ！！

「「どわああー！？」」

採掘兄弟に　しょうりした

第二十三ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　分かれ道の案内人　（Ｌｖ．６）

「さあ　あなたは　みぎとひだり　どちらのみちに　いきますか？」

「うーん　……みぎだ！　みぎにいく」

「みぎですね　では　おきをつけて……」

おとこは　みぎのみちへと　すすんだ

（どちらにすすもうが　あのよいき　ですがね）

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「スライムですか　あなたは　どちらのみちへ？」

ベチャァッ！

「ぐぅあああああああああああああああああああああああああああああああ！？」

あんないにんに　しょうりした

スライムは　ちょくしんした

第二十四ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　罠師ライド　（罠師Ｌｖ．２７）

バチン！

スライムは　トラップに　ひっかかった

「よっしゃああ　えものが　かかったぜぇ！」

ライドが　きしゅうをしかけてきた

ぐにゅり

スライムは　トラップを　とりこんだ

「なっ……」

ビシビシビシッ！

「う、うわあああああああ

第二十五ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　宿命のライバル　ガイズとタナトス　（騎士Ｌｖ

「うォオオオオオオオオオオオオオオオ　ガイズゥゥゥゥ！」

「タァナァトォォースゥゥゥゥ！」

ギィン　ガッ　ドカッ　ヒュン

「きさまさえ　きさまさえいなければぁぁ！」

「いいぞ　もっとだ　もっとおれを　たのしませろォ！」

ガサッ……

スライムが　あらわれた

「「これで　おわりだぁぁ　ひっさぁぁぁぁーつ……」」

バシ　ベシ

「「ぐわあああ！？」」

ガイズとタナトスに　しょうりした

第二十六ゲル　無敵S　VS　瀕死パーティー　サファイア　（戦士　治療師

「もうおわりか？　チームサファイア」

「ぐ　おのれ　こんなところで　ぜんめつしてしまうのか」

「そうだ　せめてやすらかに　……きえてしまえ！」

モンスター　レッサーデイモンは　デスフレイムをしようした

ガサッ……

スライムがあらわ……

ドンッ！

「なっ　ス、スライムだと！？　じゃまをするな」

「！？　すきありぃぃ！」

ズバッ！

「ばかな　そんなことがぁぁ！？」

レッサーデイモンに　しょうりした

「かった……のか？」

ズドッ！

「ぎゃあああああああああ！？」

瀕死パーティー　サファイアは　全滅した

第二十七ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　迷子勇者セイン２　（勇者Ｌｖ．？？）

「いくらあるいても　でくちがない　……さては　てきのようじゅつか！？」

ガサッ……

「！？　あまい　そこだ！」

セインは　ソニックカッターツヴァイを　しようした

ズバァッ！！

モンスター　スライムは　バラバラになった

「あっ　またスライムだったのか　……ものすごい　さっきをかんじたと　おもったのに　ホントにごめんな」

セインは　さきをいそいだ

ズル……ピチ、ピチ……

スライムは　くっつきさいせいした

「……」

スライムは　セインのすがたを　きおくした

第二十八ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　呪咀吐きアン　（呪術師Ｌｖ．４１）

「ああ　……にくい　にくたらしい」

ガサッ……

モンスター　スライムが　あらわれた

「ああ　にくい　くるおしいほどにくい！　いのちとひきかえにしても　おしくないほどにくい！　にくいにくいにくいにくいにくいにくい！」

ベシッ！

「おぉのれぇぇぇぇぇぇぇ　おまえもにくいぃイイイ

第二十九ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　賞金稼ぎライル　（ソードマスターＬｖ．９９）

「わたしに　かてるわけ　ないだろう！」

モンスターの　むれにしょうりした

「きわめにきわめた　わがけんじゅつ　もはや　このように　てきはない！」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「きたな　……スライムのばけもの！」

ライルは　ヘイズスライサーを　はなった

ズバッ！

スライムは　バラバラになった

「ちがったか　……うわさの　むてきスライムとは　いったい……」

ズルズル……

「むっ？　こいつまだ……」

スライムは　メタモルフォーゼを　しようした

「なっ……？」

勇者セインスライムが　あらわれた

第三十ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　賞金稼ぎライル２　（ソードマスターＬｖ．９９）

「なんだと　……こいつ　すがたを　コピーしたのか！？」

セインスライムは　ドラゴンバスターを　しようした

びしゅっ！

「ぐっ、ぐあああああああ

第三十一ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　討伐依頼

【重要依頼】

“スライム”一匹の捕獲、もしくは討伐。

【依頼内容】

上記の通り、スライム一匹の捕獲、もしくは討伐を願います。但し、突然変異体と思しき異常な能力を持つ個体に限ります。出来得る限り生け捕りにし、依頼主の元へ運搬して頂ければ有難いです。

【依頼達成報酬】

捕獲……二千万エン

討伐……五百万エン

【依頼主】

ギルドＮｏ．４６４９　パーティー昇龍

「おいおい　……なんだこの　ぼうけんしゃを　バカにしたよう

な　いらいは」

「しかもパーティー昇龍のいらいだと？　スライムのいっぴきもたおせないのかよ？」

そのとき　ひとりのおとこが　ギルドにあらわれた

「ん？　あいつは　ライルじゃないか？」

「ほんとだ　あのてんさいけんしか　……ボロボロみたいだがまおうにでも　いどんだか？」

「よぉライル　どうしたおまえらしくねぇ　だれにやられた？」

「……スライム……」

「えっ……！？」

「わたしはスライムに　まけたんだ！　おいギルドマスター、パーティー昇龍につたえておけ、二千万では　わりにあわないとな！」

「な……し、しょうきかライル？」

「ああ、わたしはしょうきだ！　ほかくなんぞも　できそうにない　五千万だ　とうばつに　五千万よういしろ！」

ライルは　いつものさけをのみほして　でていった

「……おいおいおい　どうやらこのいらいは……」

「おおあな　らしいな」

ぼうけんしゃらの　めのいろが　かわった

第三十二ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　女魔王カルミンツァー　（魔王Ｌｖ．？？）

「うふふふ　できた」

カルミンツァーは　ばらのはなを　まんぞくそうにみおろした

「ああ　ゆうしゃセインは　まだここにこないのかしら　ここではやく　……かれにあいたいわ」

ガサッ……

「！？　だれっ！？」

カルミンツァーは　ディメンジョンシュートを　しようした

ぐばぁっ！

モンスター　スライムは　じくうのはざまに　たたきこまれ　しょうめつした

「……スライム？　ここまで　スライムがはいってきたの？　けいびは　いったいなにを……」

スライムに　しょうりした

第三十三ゲル　無敵S　VS　そこそこパーティー　パンジー　（戦士Lv.3

「な　なあ　ばけものスライムのとうばつなんて　ボクらには
にがおもくない？」

「だいじょうぶさ！　さっきあやしげなみせで　でんせつのせいけん　エクスカリバーを　ぜんざいさんはたいて　かったじゃないか」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「きたな　くらえっ！」

ブンッ　ボキッ！

「えっ　お、おれた……？」

「まさか　これは……」

ビシッ　バシ！

「「にせものだぁぁぁ

第三十四ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　扱き使われている村人達　（一般人）

「おお　スライムがおったぞ　みなのしゅう　つかまえるんじゃあ！」

バタン　カチャ

スライムを　おりにとらえた

「しかしなんだ　スライムなぞつかまえて　どうするっつうんじゃろ」

「さてなぁ　おやくにんの　かんがえることはわからんわい」

「はたけもたがやさなならねってのに　めいわくなもんだ」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「おい　あすこにも　スライムがおるで！」

「ああ　ええわい　もうおりもいっぱいだぁ」

むらびとらは　ひきあげていった

第三十五ゲル　無敵S　VS　パーティー　デコチビ　（ハンターLv．45）

「そっちいったぞ　デコ！」

「デコいうな　チビ！」

デッコーは　アイアンネットを　しようした

バサッ

スライムのほかくに　せいこうした

「よくやったぞデコ！　スライムつかまえてつれてくだけで　五千万　かるいもんだ」

「しかしへんいしゅだとか　……こいつは　ただのスライムだろ」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「おっ　またでたぞデコ！」

「いいかげんにしろ！　おれはデッコーだチビ！」

バサッ

ブチッ！

「「えっ……！？」」

ベシッ　バシィ

「「ぎゃあああああああああああこいつだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」」

パーティー　デコチビにしょうりした

第三十六ゲル　無敵S　VS　ベテランパーティー昇龍　リーダー　ブレッド

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「くっくっく　……さがしもとめていたよ　あれから　くんれんをくりかえし　かんせいしたわざ　とくとみよ！」

ブレッドは　スライムキラーを　しようした

スドン！

スライムは　こっぱみじんになった

「やった　……やった　ついにかったぞォォォ！」

「うーん　むにゃ……かったぞー……」

ブレッドは　ゆめをみている

「む？　ぎゃあああああああああああああああああああああああ！？」

ゆめのなかで　スライムにはいぼくした

第三十七ゲル　無敵S　VS　迷子勇者パーティーの一人　ファル　（超魔導師

「たおせ～すすめ～ごーごごー」

ガサッ……

「ん？　モンスターかなー？」

モンスター　スライムがあらわれた

「スライムー？　なんでこんなとこに？」

ひゅっ！　ビリッ

ファルのナップザックがやぶれ　ふんまつがまった

「うわっ　あぶないなぁー　……ただのスライムじゃない？」

スライムは　こなをかぶった

「！！！！！！！！！？？？？？？？？？？？」

スライムは　ほうかいした

「えっ？　なんで……？」

スライムに　しょうりした

「まっ　いいか　すすめ～」

第三十八ゲル　無敵S　VS　秀才パーティー　マナバャアタケラア・ヌヴェン

「スライムかー　スライムといえば　せいそくちはどこになる？」

「だいたいせかいじゅう　どこにでもいる　それよりもこのばあい　スライムのとくせいをしらべる　べきだ」

「それこそむいみ　へんいしゅと　ふつうのこたいの　ちがいをしらべるべき」

「まずは　あるくべきでは？　ミーティングもいいが　それだけでは　むいみだ」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「だからだな……」

「ちがう！」

「むいみ！」

「りかいふのう！」

バシバシバシバシ！

「「「「「ばかなぁぁぁぁずのうがまけたぁぁぁぁ

第三十八ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　秀才パーティー　マナバャアタケラア・ヌヴェント・ケルミーニス

豆知識

マナバャアタケラア・ヌヴェント・ケルミーニス

訳……偉大なる高みへと到達せんため常日頃より神の知識に触れ続ける賢い四人組

因みに略して、マヌケ

第三十九ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　矛盾商人チャック　（商人Ｌｖ．３７）

「このたては　すべてのこうげきをふせぎ　このほこは　あらゆるものをつらぬくよ！」

「なら　そのほこで　たてをついたら　どうなるの？」

「えっ　あ　あー……」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「どうなるの？　ねぇ」

「そ、それは……」

スライムの　こうげき

バガン！　ベキィッ！

「ああっ　さいきょうのたてとほこがこなごなにぃぃぃぃー！？」

ベシッ！

「「うわあああああああああああああああああ！？」」

矛盾商人チャックに　しょうりした

第四十ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　スライム保護団体　（会員　×　３）

「はんたーい　はんたーい　スライムのらんかくを　ゆるすなー！」

「スライムをほごしろー　やばんなぼうけんしゃらに　てっついをー！」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「おおっスライムだ　こわがらなくていい　われわれは　きみたちを　ほごしに……」

バシィ！

「ぎゃあああああああああああああああー！？」

「「かいちょう！？」

ベシャ　ビタン！

「「うわあああああああああああああああああああ！？」」

スライム保護団体に　しょうりした

第四十一ゲル　無敵S　VS　喧嘩中のパーティー　ラブアンドピース　（剣士

「おねがい　わたしもたたかうわ　かたきをうたせて！」

「ダメだ　きみはてを　よごしちゃいけない！」

「どうして！？　かたきをうつまで　いきろっていってくれたじゃない！」

「あれは……」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「うそつき！　わたしは、わたしはっ！」

「ちがう！　おれは……」

ビシッ　バシィ！

「きゃあああああああああああ！？」

「ぐわあああああああああああああ！？」

パーティー　ラブアンドピースにしょうりした

第四十二ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　無駄骨折りのルーフ　（東洋流剣士Ｌｖ．５５）

“うーん　……どれもちがいます　これではしょうきんは　はらえません”

「くそっ　昇龍のれんちゅうめ！　スライムはスライムだろ　どうちがうってんだ！」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「ちょうどいい　てめえのせいで　とんだむだぼねだ　はじけろオォ！」

スライムは　カウンターをくりだした

ドカァッ！

「ぐおおおおおおおおおおおおおおおおおぜんぜんちがうぅぅぅ

第四十三ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　パーティー　ローンウルフズ　（ロック吟遊詩人

「は？　スライムぅ？　んなもんに　きょーみねえし」

「おれたちゃ　やりたいことやるだけなンだよ」

「いやでも　ほうしゅう五千万だって……」

「「ご、五千万！？　……なんつーか　スライムていま　どストライクだし！」」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「「よっしゃ　いっちょはでに……」」

ビシッ　ガスッ

「「マジでかぁぁぁ

第四十四ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　修羅場中パーティー　アーリースカイ　（女戦士

「なんなのよアンタ！　スカイからはなれなさいよ！」

「えーーなんでですかぁー？　もしかしてぇー、スカイさんとアリィさんはぁ　そーいうかんけいなんですかぁ？」

「！？　そ、そんなわけないでしょバカぁ！」

「ま、まあまあふたりとも　なかよくなかよく……」

「そーですよぉ　あたしとスカイさんみたいに　なかよくしないとぉー」

「ッ！！　もうしらないっ！　おふたりとも　おしあわせに！」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

（スカイのバカバカ！　だいっきらい！）

ビシッ！

「きゃあああああああああああああああああああああ！？」

「アリィ！？　うおおおおおおお！」

「あっ　スカイさん！？」

「アリィは　ぼくがまもるんだぁぁ！」

バシン

「うわあああああああああああああああああああああ！？」

（そうなんだ　これがふたりのつよいきずな　……かなわないなぁ　ホント）

パシィッ！

「きゃあああああああああああああああああああああ！？」

パーティー　アーリースカイにしょうりした

第四十五ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　ベテラン部隊　ストロベリーパフェ　（ソルジャ

「そっちだぁー！　そっちにおいこんだぞ！」

“つうしんじょうきょうよし　りょうかい！　これより　……うっ、うわああああああああああああああああ！？”

「なっ！？　どうしたクッキー！　ちっ、レンガよ　クッキーがやられたらしい！」

“こちらレンガ　しゅういにけいかいし　……ぐあああああああああああああああああああ！？”

「なっ　……もう　やられたというのか？　そんなバカな……」

ガサッ……

「！？」

モンスター　ス　ラ　イ　ム　が　……

う　うわああああああああああああああああああああああああああああああああああああ

第四十六ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　復活の神殿の人々

「さいきんは　ふっかつのいのりを　うけるものが　ふえてますね」

「そうですね」

ガサッ……

「むっ！？　だれですか！」

モンスター　スライムがあらわれた

「なぜモンスターが！？　おいだしてしまえ！」

「まちなさい　……かれはきずついています　かいふくのじゅつを」

「しっ　しかし　モンスターですよ？」

「かけておやりなさい！」

「はい……」

エールは　かいふくのじゅつをとなえた

スライムは　かいふくした

ズルズル……

スライムは　でくちへと　すすんでいった

「な　なぜ……？」

「モンスターにも　こころがあります　それをわすれてはいけません」

第四十七ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　盲目の美女シーラ　（救済者Ｌｖ．？？）

「アナタは　なんなのです？」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「なんだか　すごく　かなしそうです」

“……”

「きかせて　あなたのオモイを……」

シーラは　ダイブインマインド　をしようした

“……る、……こん……く……あい……ド……む……ない……”

「えっ？　よくきこえない……？」

バシィ！

スライムの　こうげき

「きゃっ……」

スライムは　にげだした

「あっ、まって！　……どうして　どうしてなの？　きこえなかったの　はじめて……」

第四十八ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　体調の悪い男ベイン　（破壊戦士Ｌｖ．８８）

「ううっ　くそう　なんだかふらふらするし　さむけがするぞ……？」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「ちくしょう　スライムかよ　……きょうはみのがしてやる　なんだか　はなもむずむずしてきやがったしな！」

べちゃっ！

「ぎゃあああああああ

第四十九ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　被害者代表ブレッドとクリス　（重戦士　アサシ

「ふぅぅぅん！　はぁぁぁっ！」

月光照らす野原の上で、一人の男がひたすらに剣を振るう。少しでも腕に覚えの有る者ならば分かるだろう、荒れ狂う波にも明確な法則があるのだと。

男の名はブレッド。かつてのパーティー昇龍のリーダーであり、かつて魔王打倒でさえを目標にした男。

だが……そんなものは無価値だったと、彼は言った。

「俺様は……いや俺は、勝ちたい……」

頭を丸坊主にし、何故か片眉を剃り落とし、どうしてか上半身裸で素振りを続ける彼。その鬼気迫る様子は東洋で言うところの赤鬼か閻魔大王か、である。

「ざぁぁ！　だりゃあああ！　……何か用か」

ピタリ、と素振りを突如止めた鬼は言う。

「さっきからずっと、こちらを伺ってるよなぁ？　誰だか知らんが出てこい、相手になるぞ」

ブレッドの指摘した木陰から、それは素直に月の下へと現れた。

「さすがです……パーティー昇龍……リーダー……ブレッド殿」

「女、か。残念だったな、俺はもうリーダーではない。ただの一冒険者だ」

「そうでしたか……しかし……パーティーの方は……あなたの帰り……待ってましたが」

ハエがブンブンと頭の周りを回ってるみたいな調子で、女は語る。だがブレッドには、不思議と一言一句がはっきりと響いた。

「では……一つだけ、お聞きしても？」

「内容次第だが」

「……申し遅れましたが、私はアサシンアサルトというパーティーのリーダー、クリスといいます。名前位は知っているでしょう？」

女は顔を覆う覆面を外し、言った。月光があるとはいえ、微かに口元と目元が見えた程度だ。

が、ぶっちゃけて言うならば期待通りの美女であった。ブレッドが以前公言していた好みのタイプ、それともピタリ合致する。

「スライムに関する依頼……あれを出したのはあなた？」

クリスは問う。依頼とは、無論アレの事だ。今世間で話題騒然の

ヤツなのだ。しかしブレッドは知らん！　と一喝。更には詳しく教えろとさえ言って来たのである。

「えっと……だから……突然変異スライム討伐で五千万エン、とあなたがリーダーだったパーティーから……依頼が出てるの」

「なんだとぉぉ！？　馬鹿かあいつらめ……“パーティー昇龍は無様にもスライム如きにやられてしまいました☆”と言い触らしてる様なものではないか！」

「まあ、そんな些細なゴタゴタは放置して……」

「些細だと！？　放置だと！？」

「つまりアナタは、とてつもない素早さと攻撃力、知性までもを兼ね備えた化け物スライムに負けたという事だろう？」

「ち、知性があるのかは知らんがそうだ！　信じられるのか、この惨めで無惨な俺様をを！」

「ええ」

「……え？」

「ええ」

「え、えええ？」

一言どころか一文字。

「私も、そいつにやられたからだ。ただのスライムと変わりない外見だった……」

ガサッ……

「「！？」」

モンスター　スライムがあらわれた

「ほぅ、噂をすればなんとらや、か。丁度いい……」

ブレッドは戦闘態勢に入る。

「……私もだ、私にも戦わせて貰う」

クリスもまた、戦闘態勢を取る。

「引っ込んでろ、アレは俺の怨敵よ」

「なんとやらを、なんとらや、とか言う男は危ない。お前こそ引っ込むがいい」

「……好きにしろ。ただし邪魔はするな」

「お前こそ」　二人は同時に駆け出した。

つづく

第五十ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　被害者代表ブレッドとクリス２　（重戦士　アサシ

ビシィィィィィィ！

「「ぎゃ亞あああああああああああああああああアアア

第五十一ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　勇者セインと魔王カルミンツァー１　（勇者　魔

この世界において“最強のモンスター”との烙印を押されているのは如何な存在か？

意見様々、異種異論はあろうが大概の人々はこう答えるであろう。

“魔王”と。

「ふふっ、もうちょっと」

天高くそびえ立つ魔王城、その最奥の一室にて魔王と呼ばれる者は密かにほくそ笑んでいた。

魔王“カルミンツァー”である。漆黒の鎧を身に纏い、二本の角は雲を向く。それは代々続く由緒正しき魔王の血統の証だ。

だが魔王とはいえ、れっきとした女でもある。初め女性であるからという理由で魔王候補が乱立しかかった事もあったが、最近はその実力を思い知ったのか異論を唱える者もいない。

「……何をなさっておいでです、カルミンツァー様」

「ああ、ドクトル。見て分からない？　部屋を薔薇の花で埋め尽くそうかと思って、一本一本植えてるのよ」

ドクトル、と呼ばれた白衣の男は、シルエットの約半分を占める程の巨大な頭を揺らし、言う。

「見れば分かります。その様な行為をなさる意味を訪ねているのですが」

「それはね、勇者セインの為よ。彼がここへと辿り着いた時こそ、最後の戦い……それをより派手に演出するの。攻撃の度に花びらが散るなんて絵になると思わない？」

「勇者セインですか。貴女は口を開けばそればかりだ。既に悪魔四天王も敗北しました、暗殺でも闇討ちでも行えばいいと考えますが」

「ふぅん、ねぇドクトル……あなたももっと感情的になりなさいよ。人間でも唯一私の目にかなった者、そう、セイン。でも私は魔王だった、許されざる関係、覗く悲劇。それを精一杯飾るのに意味は無いかもしれないけれど、気分は凄く高ぶるの。どちらかが歴史の一ページになるのは必死、だけどそれが私であれ彼であれ、ただの一枚じゃツマラナイ……アナタに分かって？」

「理解に苦しみますな」

「ま、いいわ。ちょっと出掛けて来るから」

「また……奴の所ですか」

「野暮はなしにして頂戴。じゃ、留守は任せたわ」

魔王は窓を開け放つ。雷と暗雲と時々強風……背中のコウモリ状な翼を広げ、飛び立った。向かい風を切り裂き推力に変えて。

「……ふん、ヒロイン気取りの小娘が……。私の様な知識を持つ者こそが、王に相応しいのだ……なぁ、わたしの可愛い可愛い……」

ガサッ……

・

勇者セインは、道に迷っていた。なんとか山を二つ越えた、が、仲間とは依然はぐれたままだし、そもそもここがどこか分からない。

「うぅ……は、腹が、減って……目眩が……」

山を下り始めた頃合いからか、モンスターが一匹たりとも現れなくなった。現状、モンスターを求めるセイン、理由は人間三大欲求の一つ、食欲。

「く、そ……なんで……モンスターがいないんだろう……め、メシ……」

遂に膝が地に付く。景色が暗転しぐにゃぐにゃにねじれて来た。最早限界か、という時に彼を救ったのは一陣の風だった。

ふわっ、と鼻元を抜ける風。心地よい……肉の香りが！　風に肉の香りが混じっているではないか！鳥か豚かそれともゴブリンかそれともそれとも……この際何の肉でもいい、食えさえすればなんでも構わん！　セインはがばと瞬時に身を起こすなり、弩弓が如く駆け出した。

「メシだぁぁぁぁ！　メシのぉぉ匂いだぁぁぁぁぁぁ！」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれ……

「メシぃぃぃぃぃ！」

ゲシッ！

「！！！！！！！！！！！！！！！！！？」

スライムに　しょうりした

さて、勇者は凶悪スライムを撃破したことにも気付かず、匂いの発生源、即ちポツンと建った古びた屋敷に辿り着いた。かなり前に放棄されたのか、外壁のレンガはひび割れ或いは欠け……名も知らぬ植物のツタが絡む。

どう見積もっても、二・三年は人が居なかったであろう屋敷。しかし空腹勇者は一直線に扉へ向かい、ドンドンドンと激しくノック！

「すいませぇぇん、誰かっ、誰かいませんかっ！」

本当は誰かが居ると分かってる。嗅覚刺激がなによりの証拠だ。

「はぁーい……あら、勇者セイン様」

「え？　……えええぇぇ！？　カルミーさん！？」

そう、勇者と魔王は顔見知りだったのです。

第五十二ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　勇者セインと魔王カルミンツァー２　（勇者　魔

「いただきまーす！」

セインは　りょうりにとびついた

「ふふふっ　セインさまたら　よほどおなかを　すかせていたのですね」

「あっ　こ、これはしつれい　おみぐるしいところを……」

「いいえ　おいしそうにたべられるのは　なんだかうれしいです
さ、どんどんたべてください」

「あ、ありがとうございます　ほんとうにカルミーさんの　りょうりはおいしいです！」

たべるセイン　ながめるカルミンツァー

「ん！？　カルミーさんさがって　なにかいる！」

「えっ？　えぇ……」

（たしかに　……なにかしら　このまがまがしい　けはいは）

ガタッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「スライム？　……いや　ちがう　もっともっとじゃあくな　なにかだ」

スライムは　メタモルフォーゼを　しようした

スライムは　ゆうしゃセインの　すがたをコピーした

「「なんだと！？」」

第五十三ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　勇者セインと魔王カルミンツァー３　（勇者　魔

キィン！　カン！

「くっ　こいつ　のうりょくまでいっしょなのか！？」

（たしかに　……あのうごき　セインにまさるともおとらない）

「！！！！」

ばしっ！

セインのつるぎは　くだけた

「しまった！？」

スライムの　ついげき

「セインは　……やらせない！！」

カルミンツァーは　アブソリュートゼロを　しようした

「！！！！！？」

スライムはこおりつき　こなごなにくだけた

スライムに　しょうりした

カルミンツァーは　ほんらいのすがたに　もどってしまった

「……え、カルミー……さん？　そ、そのすがたは……？」

「……セイン　……ばれちゃったか」

「まさか、そんな　……カルミーさんは……」

「そう　わたしはまおう　カルミンツァーなの」

「う、　うそだぁぁぁ

第五十四ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　まあまあパーティー　タンポポ　（戦士Ｌｖ．４

「な、なぁ　おれたち　だいじょうぶだよな？」

「だいじょうぶさ　しっかりと　たんれんをつんできたじゃないか！」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「へっ　スライムなんぞ　ひとひねりだ！　いくぞ　てんちのかまえ！」

「おおっ　はじゃのかまえ！」

スライムは　ようすをみている

「「くらえひっさつ　てんちいんようあっきめっさつはじゃたいせいおおばんちかいなんかせいじょ、ガリッ……」」

ふたりは　したをかんだ

ビシ　バシィ！

「「うわあああああぁぁぁ

パーティー　タンポポにしょうりした

第五十五ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　パーティー味噌醤油風味

「ぎゃあああ！？」

ビシッ！

「ぐはあああ！？」

ドスッ！

「なんとおおお

第五十六ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　宿屋の受付嬢　（一般人）

「いらっしゃいませー！」

ガサッ……

モンスター　セインスライムがあらわれた

「おとまりですか？」

セインスライムは　うなずいた

「えっと　おへやはどちらに……」

チャリチャリン……

セインスライムは　３０００エンを　しはらった

「あ、ありがとうございます　３０００エンということは　いっぱんですねー」

セインスライムは　うなずいた

「では　３０３号室です　どうぞ」

セインスライムは　へやへと　いそいだ

（みつけたぞ　ゆうしゃセイン……）

こくいのおとこは　セインスライムの　あとをつけていった

第五十七ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　黒衣の復讐者　（デモンＬｖ．８８）

「ゆうしゃ　セインのへやは　ここか……」

３０３号室まえ

「きさまにうけた　くつじょく　いまこそはらすとき！」

バァン！

「ゆうしゃセイン　かくご！！」

モゾ……

へやのなかには　スライムがいた

「なにっ！？　セインはどこだ！」

バシン！

「ぐおおお

第五十八ゲル　無数Ｓ　ＶＳ　宿屋の窓ガラス　（１２５０エン）

「なにごとですか　いまのひめいはー！？」

３０３号室に　ひとがあつまってきた

「なんだあれ！？　モンスターがたおれているぞ　あくまだ！」

ガサッ……

「おい　あそこにもなにかいる！」

モンスター　スライムがあらわれた

「なんでスライムやら　あくまが　こんなところに……？」

パリィィィィン！

スライムは　まどガラスを　ふんさいした

シュバッ！

スライムは　にげだした

「ああっ　にげた！」

「まってー　せめて　ガラスのしゅうりだいをー！」

チャリン

しゅうりだいが　なげこまれた

第五十九ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　隙を伺っていた男マーフィ　（ギャンブラーＬＶ

「よし　いまだ！」

マーフィは　スライムをほかくした

「よっしゃ　こんどこそ　あたりだろ！　ぼうけんしゃを　けちらしていたの　みてたんだぜ！」

スライムは　ていこうしている

「むだだむだだ　このかごは　キルフハッシャのかごだ　おまえにはもったいないレアアイテムさ！」

ガンッ　ガンッ！

「さーて　いらいぬしのところへ　もっていくか！」

ガンッ　ガンッ　ガンガンガンガン　ガガガガガガガガガ

「うわっ！？　いてて　おとなしくしてろ！」

スライムは　つれていかれた

第六十ゲル　無敵S　VS　スライムを捕獲した男マーフィ　（ギャンブラーL

「よし　ここか」

マーフィは　パーティー昇龍の　ほんきょちにたどりついた

スライムの　ていこうはやんでいた

「おい　スライムをもってきたぜ　こいつこそ　まちがいなくほんものだ」

「かくにんさせていただきます　……しんでませんか？」

「なんだと！？」

スライムは　ほうかいしている

「ばかな　さっきまでは　ぴんぴんして……」

マーフィは　かごをあけてしまった

ヒュッ　バキィッ！

「ぐあああああああああああああああああああああああああああああああああああ！？」

マーフィに　しょうりした

第六十一ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　パーティー昇龍　（剣士　炎魔法使い　賢者ＬＶ

「まちがいない　こいつだ　このスライムがやつだ！」

パーティー昇龍は　さっきだった

「いまはなき　おじちゃんのかたき　とらせてもらうからね！」

「いや　ふつうに　ピンピンしてますが？」

「ま、まあともかく　かくごしろスライムめ！」

“……”

スライムは　メタモルフォーゼをしようした

パーティー昇龍リーダー　ブレッドスライム　があらわれた

「「「なにぃぃ！？」」」

ブレッドスライムは　ひっさつのかまえを　とった

「ちょっと　あれってまんま　おっちゃんじゃん　わたしむりー」

「いくらにせものとわかっていても　……やりにくいですね」

「くそォォォォ　なんだってこんなこと！」

スライムは　おうぎを　はなっ……

「なにしているきさまらー！　パーティー昇龍のながなくぞ！」

“！？”

「このこえは……」

「もしかして……」

「いや　もしかしなくても……」

「てきをまえに　すきをみせるなと　おしえたはずだー！」

リーダー　ブレッドがあらわれた

「「「リーダー！」」」

「スライムやろう　おれがきたからには　もうすきにさせん！」

“……”

ブレッドは　ひっさつのかまえをとった

つづく

第六十ニゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　被害者代表リターンズ　１

「喰らえぇ、ソードバンカァァァァー！」

地を捲り上げ奔る衝撃波。ブレッドの放った一撃により戦いの火蓋は切って落とされた。

ブレッドスライム、略してスラブレはひょいと身を躱すと、本物と同等の大剣、を片手で操った。負けじと剣を正面からぶつけるブレッド。

「ぐぐっ……力比べは不利か、だがな……」

「リーダー、任せろ！」

「応！」

ブレッドは更に力を込め、スライムの両手を、剣を封じる。その隙に背後より戦士ノールの剣撃が強襲。

キィン！

と、金属音。背中目がけ振るった剣は第二の剣、それを持つ第三第四の腕により阻止されていた。背中、肩甲骨下より生えた腕が二本。

「うおっ、なんじゃこりゃあ！？」

「ビビってんじゃねぇノール、何でも有りな相手なんざ今更だろ！」

二人の力にびくともしないスラブレ。そこに魔法使いが言う。

「二人とも間に合ったら下がってねー！　ひっさぁーつファイヤレイン！」

上空に描かれた巨大な魔方陣。炎魔法使いフェイによる広域殲滅魔法が発動したのだ。一定範囲内へと隕石群が如く火球が降り注ぐ。

「「ちょ、フェイィィィィー！」」

どうにか効果範囲から滑り込みで脱出した二人。一方スライムは爆心地に居た。荒れ狂い燃え盛る炎の雨が偽物にヒットする度、姿をグニャリと溶かし変形させてゆく。

そこに賢者クロルが、術式を完成させた。光が突き出された両手の平に収束してゆく。

「聖なる光よ邪を貫けディバインレイザー！」

焦土と化したその場所へ、三本の光の矢が飛来。人間の型を崩しつつあったスライム本体を確実に穿つ。未だ、ピクピクと敵は動いていた。

「リーダー！」

「いっけぇおっちゃん！」

「今です早く！」

メンバーの声が重なった。ブレッドは熱くなりつつある目頭を押さえつつ、四肢に力を込める。

「お前ら……よぅし、任せろ！」

地を蹴り上げ、ブレッドは再度……いや、今度こそスライムへと突撃を敢行する。本人の強い感情か、はたまた技か剣がより鈍く光っていた。

と、そこへ彼と足並み揃える者が一人、どこからともなく現れた。直前まで、存在を気付かせないとは流石である。

「私も行かせて貰うぞ、ブレッド」

「クリスか！？　無事だったようだな」

「当然だ、奴を倒すまで休む訳にはいかない」

短刀握りしめ走るのは、パーティーアサシンアサルトの元リーダー、クリス。目的は彼女も一緒、スライムの打倒である。

「それはダメだ、トドメは俺がさす！」

「なら競争だ、早い者勝ち」

「それでいい！」

意見はまとまった。

「「うオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」」

二人は吠える、獣の様に。その咆哮に感応したか、スライムは途端に活性化し身体を風船みたいに膨らませてゆく。その外面にはまんべんなくトゲが並ぶ。

針マンボウが膨れっ面を見せているみたいだ。そして、次にその刺々をミサイルの様に飛ばして来た。

襲い来る、ニードルのシャワー。が、二人は最早そんなモノでは止まらなかった。いや、どころか益々加速する。ただの一点、目指すは憎っくきアイツ。

「ぐっあああああああああああああ！？」

しかし……クリスが一発のニードルに肩口を貫かれ、その場に崩れる。

「なっ、クリス！？」

そして思わず振り返ったブレッド。直撃を受ける、ただし剣にだ。自慢の大剣が杭の様になったニードル直撃により真っ二つに。

後少し、後少しなのに！

「くっ……だが俺にはまだ拳が……」

「ブレッドォォ、私のエモノを使えぇぇぇぇ！」

クリスだ、彼女が最後の力を振り絞り短刀を投げ付ける。一直線に飛びニードルを躱し、そして見事、ブレッドの手中へと納まる。

「恩に着る……スライムよ、トドメだァァ！」

尚も飛来するニードルを避け、くぐり或いは跳ね、そうしてついには彼は間合いに飛び込んだ！

「リーダー！」

「おっちゃん！」

「ボス！」

「ブレッドォォ！」

「「「「「いっけぇぇぇ

第六十三ゲル　無敵S　VS　被害者代表最終回

ズバァッ！

“……！！！？”

スライムは　まっぷたつにきりさかれた

「やっ……た……？」

ピク……ピク……

ドロッ……

スライムは　うごかなくなった

「やっ、たあああああああああああああああああああああああああああああああああたおしたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

パーティー昇龍は　スライムにしょうりした

「う、うおおおおおおおやったぜリーダー！」

「おっちゃんすごい！」

「やりましたね、ボス！」

なかまは　リーダーのもとに　かけよった

「おれはいい　それよりクリスを　たすけろ！」

ガサッ……

「むっ？」

ガサッガサッガサッ

「おまえたち　クリスをつれてたいひだ　おれがじかんを　かせぐ！」

ブレッドはいった

「いいやリーダー　おれものこるぜ　ちゆじゅつつかいのクロルと　フェイはさっさとにげろ！」

「どうやら　ぜんめつをさけるためにも　そのほうがよいでしょう　どうかごぶしで」

クロルは　てったいした

「わたしはのこるよ！　なぐるけるばっかじゃ　バランスわるいでしょ」

「すまんフェイ　では　いくぞ！」

「「おう！」」

スライムらは　いっせいにうごいた

「「「おれたちの（わたしたちの）たたかいは　これからだ！！！」」」

むてきスライムは　こんかいをもって　しゅうりょうです

いままでの　ごあいどく　ありがとうございました

第六十三ゲル　無敵ＳＶＳ被害者代表最終回（後書き）

ウソですよー。

閑話休題

スライムバブル　いらいのとりさげにより　しゅうりょう

かくちのはんのう

―ぼうパーティー

「ぎゃあああああああああああああ！」

―ぼうきぞく

「ひいいいいいいいいいいいいいいいい！」

―ぼうゆうしゃ

「カルミーさぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！」

―ぼうまおう

「ゆうしゃよ　まおうじょうでまつ　そこまでやってくるのだ！」

―？？？

“ぼくは　ほんとうは　こんなことしたくないよ　のんびり　していたいんだ！”

さまざまな　かんがえが　こうさくする

第六十四ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　特産品販売員トラス&ジョーヌ　（一般人）

「うそだろ！？　どうするんだよ　このスライムまんじゅう……」

「うれなくなるまえに　うりつくすしかないわ　こっちのスライムゼリーも」

ガサッ……

「えっ？　いまゼリーがうごかなかった？」

「そんなわけ……」

ビシッ　バシッ！

「「うわあああああああ

第六十五ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　なかなかパーティー　アマリリス　（戦士Ｌｖ．

「な、なあ　ボクたち　だいじょうぶだよな？」

「しんぱいするな　ボクたちには“けものよけのおこう”　があるじゃないか　モンスターとはそうぐうしないよ」

ガサッ……

「ひっ　なんだよ　おこうきかないじゃないか……」

「じょうきゅうモンスターか！？」

モンスター　スライムがあらわれた

「なんだ　スライムじゃ……」

「まつんだ　ステータスのかくにんをしよう」

アイテム　チェックキーをしようした

【スライム】

こうげきりょく　？？

ぼうぎょりょく　？？

たいりょく　??

スピード　??

そうごうりょく　??

「な、なんだこれは!?」

ドカバキィッ!

「「いやあああああああ

第六十六ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　本気の賞金稼ぎライル　（ソードマスターＬｖ．

「もはや　しょうきんなど　かんけいない！」

スバッ！

スライムを　げきはした

ガサッガサッガサッガサッガサッガサッガサッガサッガサッガサッ……

スライムの　たいぐんが　あらわれた

「いくらいようが　わたしはとまらぬ！」

ライルは　サウザンドカッターを　しようした

スライムの　たいぐんをげきはした

ガサッ……

「まだいたか……」

スライムは　メタモルフォーゼを　しようした

モンスター　ライルスライムが　あらわれた

「っッ！　こんどはさるまねか　くだらん！」

ライルは　メガスライスをくりだした

ライルスライムは　メガスライス′をくりだした

ガシャア！

「……ぐあああああああああああああああああああばかなっ！？」

ライルに　しょうりした

“おまえは　ぼくのなかまを　きずつけた　けしてゆるさない……”

第六十七ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　炎の料理人トルテ　（調理師Ｌｖ．７７）

「さあさあ　よってらっしゃいみてらっしゃい　よにもめずらしい　スライムりょうりだ！」

ガサッ……

「ここにとりだしたるは　なんのへんてつもないスライム　だがわたしのうでをもって　こうきゅうりょうりにうまれかわる！」

ブン！　トルテはほうちょうを　ふりおろした

ちょん

“！！！！？”

バシィッッ！

「ぐっあああああああああああああああああああああああああああ　なんといきのいいい

第六十八ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　一般的スライムＡ　（スライムＬｖ．８）

“！！！！？”

スライムＡは　がけからおちそうになっている

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

“！！”

スライムは　て（？）をさしだした

“！！？”

スライムＡは　て（？）につかまった

スライムは　ひきあげた

“……！”

スライムＡは　れいをいっている

“……”

スライムは　せなか（？）をむけると　クールにたちさった

“！！”

スライムAは　おいかけようとしたが　とちゅうでやめ　こころのなかでしずかに　かれのぶじをいのった

第六十八ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　一般的スライムＡ　（スライムＬｖ．８）（後書

むにょむにょした関係

第六十九ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　勇者パーティー最後の一人ドライヴ　（超戦士Ｉ

「ゆうしゃセイン　やつはどこにいったのか　……まおうじょうへのりこむには　かれのちからが　ふかけつだというのに」

ガサッ……

「む！？　これほどのさっき　……ただものではない！」

ドライヴは　グランドバイスを　はなった

ドスドスドスッ！

“！！！！！！！！！！！！！！！！！？”

スライム　にしょうりした

「……なんだと　あれほどのさっきをはなつとは　さいきんはやった　とつぜんへんいスライムとやらか？」

ドライヴは　あたまを　ボリボリと　かいた

「もったいない　ことをしたなぁ……」

第七十ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　苦悩勇者セイン　（勇者Ｌｖ．？？）

「ぼくは　……どうすればいいんだ」

ゆうしゃセインは　かたをおとしていた

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「ぼくは　どうしたら……」

ビシッ！

セインに　ダメージ

「くそっ　たかがおんなひとりで……」

バシィッッ！

セインに　ダメージ

「どうすればいいんだよぉぉ　おれぇぇ！！」

セインは　むいしきに　コズミックブラストを　しようした

“！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！？”

スライムはけしとんだ

スライムに　しょうりした

第七十一ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　魔王カルミンツァー　（魔王Ｌｖ．？？）

ざっざっ

まおうカルミンツァーは　まおうじょうへと　むかっている

「……ゆうしゃセイン　やはりこんわくしていたな……」

ガサッ……

モンスター　スライムが　あらわれた

「ふふ　とうぜんか……　ほれたおんなが　まおうだものな」

じり……

「だけどな　わたしも……」

スライムの　こうげ……

「あまいわ！！」

カルミンツァーは　セパレートスレイブを　しようした

“！！！！？”

スライムに　しょうりした

「だが　それはいい　ゆうしゃは　まおうとたたかうのだから」

第七十二ゲル　干からびた無敵S　VS　サニーとその父親　（一般的家庭）

「おとうさーん　ひからびたスライムが　いたー」

「へぇ　おゆでもかけたら　いきかえるんじゃないか？」

「うん　わたしやってみる！」

サニーは　なべをもちだした

「えいっ！」

バシャッ！

“！！！！！！！！！！！！？”

スライムは　ふっかつした

「わぁーいやっ……」

バシィッッ！

「きゃあああああああああああああ！？」

「サニー！？　くそ、よくも　サニーを！」

ビシッ！

「ぐわあああああああああああああああ！？」

おやこづれに　しょうりした

第七十三ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　合流した迷子勇者捜索隊　（超魔導師　救済者

「うーん　やっぱりセインは　こっちにはいなかったよー」

ファルは　ほうこくした

「わたくしも　セインさまをかんじることは　できませんでした」

シーラは　ほうこくした

「こっちもだ　あいつはバカだから　めんどうだな……」

ドライヴは　ほうこくした

ガサッ……

「む！？」

「これはっ！」

「ほぇ？」

ドライヴはとっさに　ソウルパンチをしようした

シーラはとっさに　きゅうさいのひかりを　しようした

ファルはとっさに　ひのたまバスターを　しようした

“！！！！！！！！！！！！？”

スライムは　あらわれたしゅんかん　けしとんだ

スライムに　しょうりした

「む……またしてもあのさっき　やはりただのスライムではない」

「うんうんそだねー　からだがとっさに　はんのうしちゃった」

「おふたりとも　ひどいです！　まずはあのおかたと　おはなしを……」

「あのかたもなにも　スライムだったよー？　シーラちゃんはめがみえないから　しかたないけど」

「モンスターにも　こころがあるのです　きちんとむきあえばはなしあえるはずです！」

「まあまあシーラ　あいつはマジであぶないって　はなしあいなんか　できるふんいきじゃ　なかったぜ」

いいあいは　しばらくつづいた

第七十四ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　魔王側近ドクトル　（悪魔学者Ｌｖ．１２５）

「おかえりなさい　カルミンツァーさま」

ドクトルは　あたまをさげた

「ただいま　……ゆうしゃに　せんせんふこくは　すませた　あとは　じゅんびがあるから　わたしとわたしのうえのへやには　はいらないでね」

「……しょうちいたしました」

カルミンツァーは　へやのほうへと　はしりさった

「……ふん　そうしてそこに　こもっているがいい　わたしがおうのちからをてにいれる　そのときまで」

ガサッ……

「さあ　もっとデータを　あつめるのだ　ゆけぃ！」

ズルズル……

第七十五ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　病院から抜け出した男ブレッド　（重戦士Ｌｖ．

「うっ　うわああああああああああああああああああああああ！？」

ガサッ……

「ひっ、こっ、こっちにも！」

ベシッ！

「ぎゃあああああああああああ！」

ガサッガサッ……

「……なんということじゃ　このむらもついに　おわるときがきたのか……」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「……かみよっ！」

ドカッ！

「……？」

「あきらめんのは　はやいぜ　ジーさんよ！」

「あ、あんたは……？」

「なのるほどのものじゃねぇ　だが　そうだなコイツらを　たおしたいだけのおとこさ！」

ズバッ！

“！！！！！？”

スライムを　げきはした

「あ　ありがとうございますじゃ　……しかし　もうむらは……」

「いいや　まだだ　ぜつぼうをしったにんげんなら　なににもまけん！」

ブレッドは　いった

第七十六ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　上級者パーティー狼牙　（断罪者Ｌｖ．１５０

「ハーッハッハッハッ　せけんのれんちゅうは　なさけない　たかだかスライムを　おいかけまわしていたのだからな」

「まったくだぜ　おれたちが　きけんちたいでがんばってたってのに　くだらねーよのなかに　なったよなぁ！」

「スライムごとき　ゆびいっぽんで　しゅんさつだな」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「おっ？　うわさをすれば、ってやつだな　どれ　ホントにゆびいっぽんで　たおせるかためしてみるか……」

ヒュッ！

「なんだ？　いまの……」

ボコッ！

「ぎゃあああああああああああああああああああああ！？」

「ピーク！？　なにがあったん……」

ヒュッ　ヒュッ！

「「えっ……？」」

ガッ！　ズドッ！

「「うわあああああああああああああああああああああああ！？」」

上級者パーティー　狼牙にしょうりした

第七十七ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　占い師グランドマザー　（古き占い師Ｌｖ．２０

「おおっ　なんとおそろしい！　あしきものが　せかいをおおいつくす　それも　いっしゅうかんのあいだに……」

うらないしグランドマザーはいった

「なんと　……それで　あしきものとは　いったい？」

「まるい　……そして　かたちを　もたぬもの」

「まるいが　かたちをもたぬだと？　いみがわからぬ　もっとわかりやすい　たとえはないのか？」

「わからぬ　……だが　つなみのように　おうとへと　おしよせる　いまのうちに　にげるがよかろう」

「ふん　おうが　くにをみすててにげるものか　われらがへいりょくをもって　けちらしてくれる」

ベグランシュ王は　うらないやかたを　あとにした

「だめじゃ　ひとのちからではどうにもならんよ　ひとりのおとこと　ひとりのまぞくを　のぞいてはねぇ……」

第七十八ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　辺境村の素朴な村民　（一般人）

「きょうも　へいわだなぁ」

「まったくだ　こんなひは　ピクニックにでも……」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「うん？　まいごにでもなったのかな　このスライム……」

ビシッ　バシッ！

「「うわあああああああ

第七十九ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　勇者セイン　１

「うわあああああああああああああああああああああああああ！？」

ズドン！　バキバキ！　グシャリ！

「たすけてくれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

スライムらは　むらをはかいしている

「はやくにげるんだ　みなごろしにされるぞぉぉぉぉぉぉぉ！」

「また　ぼくはこきょうに　かえってきた　なんてよわいにんげんなんだ」

そのころ　ゆうしゃセインは　むらにちかづいていた

「ん？　なんだ　むらからけむりがあがってる　……まさか！？」

セインは　こきょうにいそいだ

第八十ゲル　「お前らが居たからぁぁぁぁ！」

「……なんだ、これは」

勇者セインが見たのは、変わり果てた故郷の有様だった。建物という建物は形を崩し、あるいは紅蓮の炎にのまれつつある。

人々はまるで物の様にそこらへと転がっている。いらない人形の様に無造作にだ。

「なんなんだよ……これはぁぁぁぁぁぁ！」

「その声、セインかい？」

「！？」

今、確かに半壊の建物の下から声がした。そうだ、ここは村一番の世話焼きおばさんの家である。慌てセインは残骸をどけてみれば、下敷となったおばさんの姿。が、幸いにも僅かなスペースによって重量がモロには掛かっていないらしい。

「待ってておばさん！　いま助けるから！」

するとおばさんは首を振る。

「あたしは大丈夫だよ。それよりもあなたのご両親や村の子供達は無事かい？　あたしはそちらの方が余程心配さ」

「それは……」

子供達も何人か倒れていた。ピクリとも動いてはくれず、生死さえ定かでなかった。

「あたしゃ大丈夫さ。見ての通りぴんぴんだ、いつまでも元気な婆に構ってないで、もっと危ない目にあってる人達を助けておやりなさい！」

「おばさん……わかった。だけど危ないから動いちゃダメだよ！」

本音を言えば、家族が一番心配であった。脇目も振らず自宅に走る、走る。

そうしてたどり着いた自宅は例外なく見るも無残な格好になっていた。父と母を、懸命に呼んだと思う。そうして何度目だろうか、裏庭にて二人の姿を確認した。しかし……

父は、母に覆いかぶさる様にして、時を止めていた。

父さん、母さん、と駆け寄るセイン。反応はない。父の背には無数の傷痕。まるで母を何かから守り続けていたみたいだった。

「父さん、母さん！？」

しかしセインの接近を阻むものがあった。どこに潜んでいたのやら、無数の球体……スライムが姿を現したのである。

「スライムだと……まさか？」

あの時の記憶が脳を駆けた。あれは、スライムが自分の姿をコピーし追い詰めた時の事である。この戦いで自分はカルミーに救われて、カルミンツァーという彼女本来の姿を知ったのだ。

「また……お前達か」

スライム達はメタモルフォーゼを使用した。

「お前らが居たから、俺は失ったんだ……」

勇者セインスライム達が現れた。

「お前達が居たからぁぁぁ

第八十一ゲル　無敵S　VS　勇者セイン　2

「おまえらがいるからぁぁ！」

セインは　つるぎをぬいた

セインスライムらは　いっせいにうごいた

ヒュッ！　ブンッ！

セインは　かわした

「うおおォォォォ！」

セインは　ライジングブレイクを　しようした

スライムをにたい　げきはした

ズバッ！

「ぐわっ！？」

セインにダメージ

バキッ！

「がっ……」

セインにダメージ

ズル…ズル…

スライムらは　たおれるセインに　せまってゆく

「くそっ…くそっ！　まけられないのに　からだよ　うごいてくれぇぇぇ！」

セインスライムたちは　ダークソードを　くりだし……

「えぇーい　ブリザードゲイル！」

〃！？〃

スライムは　こおりついた

「このまほうは　まさか！？」

「みつけたよーセイン！」

ゆうしゃパーティー　らがあらわれた

第八十二ゲル　無敵S　VS　完成！勇者パーティー　（勇者　超魔導師　救済

「セインー　ようやくあえたねー　さいかいのチューはー？」

「セインさま　ごぶじでなによりです」

「あとはおれたちに　まかせておけ！」

ゆうしゃパーティーは　せいぞろいした

「ファル……　シーラさん……　ドライウ　ゞ！」

「「「おう！」」」

なかまたちは　どうじにうごいた

「さーてと　ブリザードからの　デストラクションハンマー」

バキン！

「セインさまに　てだしはさせません　ホーリーレイ！」

ビギュッ！

「バーニンナックルだぁぁ！」

ズドン！

「うおおおおおぉぉぉぉ！」　セインの　こうげき

スライムのむれを　げきはした

「みんな……」

ゆうしゃパーティーは　ぜんいんしゅうごうした

第八十三ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　勇者セインと超魔導師ファル　１

「だいじょうぶですか？　すぐに　わたしのちゆじゅつで　なおします」

「じいさん　あるけるかい？　むちゃはするなよ」

シーラとドライウ〝は　きゅうじょかつどうを　している

「……」

セインは　りょうしんのはこびこまれた　たてもののなかにいる

「だいじょうぶだよーセイン　シーラのちりょうは　たいりくいちだもん」

「ああ　……そうだな　ファル」

ははおやはきぜつしているだけだったが　ちちおやは　じゅうしょうだった

「なさけないな　ぼくがもうすこし　はやくかえっていれば……」

「それはちがう　セインはむちゃばかりいうね　はやくついてた

ら　あいつらにやられてたかもー」

ファルは　いった

第八十四ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　勇者パーティー　１

ぐぐっ……

スライムのはへんは　すこしずつ　くっついている

“……”

すこしずつ　すこしずつ　ひだいかしている

スライムの　リミッターははずされた

「ぐあああああああ

第八十五ゲル　無敵S　VS　勇者パーティー　2

「なんだ　さっきのひめいは！？」

ゆうしゃセインとファルが　あらわれた

“……”

モンスター　オーバースライムの　こうげき

「ぐっ！？」

セインに　ダメージ

「セイン！？」

バキィ！

「わあああああああああああああー！？」

ファルに　ダメージ

「ぐっ　……なんて　パワーなんだ……」

“……”

スライムは　こうげきをつづけている

「がああああああ！」

セインに　ダメージ

「やめ・・・ろぉ」

スライムは　ターゲットをへんこうした

「！？　まて　ファルにてをだすなぁ！！」

スライムのこうげき

バキィ！

ファルに　しょうりした

「う・・・うあああああああああ！？」

第八十六ゲル　無敵ＳＶＳ覚醒超勇者セイン（超勇者Ｌｖ．７８００）

「よくも　よくもファルを！」

セインは　いかりにみちている

オーバースライムの　こうげき

「おおっ！！」

セインは　こうげきをはじいた

“！？”

オーバースライムの　てはしょうめつした

「おまえぇぇ　ぜったいにゆるさない！！」

ゆうしゃセインは　めざめた　ゆうしゃのちがざわめく

「ゆうしゃのちよ　おれにちからををを！」

ちょうゆうしゃセインの　こうげき

ズバァッ！！

”！！！！！！！？“

オーバースライムを　いちげきでげきはした

「オオオオオオオオオオオオォォォォォォ！」

バキィ！　ズドン！

ちょうゆうしゃセインは　あばれている

「セイン　…ダメ　わたしは　ダイジョブ…だから」

「ウオオオオォォォォォアアアアアアア！！」

「セイン　やめて！！」

「う…フ、ァル　？」

「うん　ダイジョウブ、だから…」

セインは　もとにもどった

第八十七ゲル　無敵S　VS　ベグランシュ王国軍

「ぎゃあああああああああああああああああ！？」

スライムらは　しろをめざししんこうしている

「ええい　どうにかくいとめられんのか？」

「ダメです　くいとめられません！」

「くっ　グランドマザーの　よげんはただしかったらしい

・・・やむをえんか」

こくおうは　てったいめいれいを　くだした

「バカな！　くにをおわらせるおつもりか！？」

「そうではない　スライムどもに　もくてきなどまるでなかろう　このままでははなしあいのよちなく　ぜんめつだ

だからいまはにげるのだ」

「・・・やむをえない、か　スライムども　いまはひくだがおぼえていろ　かならずくにはとりもどす」

おうこくぐんは　てったいした

よげんどおり　くにはほろびた

第八十八ゲル　無敵S　VS　孤独のセイン　（勇者Lv．5000）

よくあさゆうしゃセインはすがたをけした

”みんなごめん　おれはいますぐ　あるばしょへとむかう
みんなはけがを　しっかりなおしてください”

とのかきおきが　のこされていた

「あのやろう　またひとりで……」

「せめて　そうだんはしてほしかったです」

「わたしのせいだ　わたしがけがさえ　しなければ……」

（ごめんみんな　これいじょうはやらせないから　あれほどのスライムをあやつれるのは　たぶんかのじょだけだ……）

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれ……

ズバッ！

”！！！！！！！！！！？“

モンスター　スライムにしょうりした

（だから　おれはかのじょと　まおうとたたかう！　それでこんなばかげたたたかいを　やめさせてやる）

セインは　まおうじょうをめざした

第八十九ゲル　無敵ＳＶＳかなりのパーティー　コスモス（戦士Ｌｖ．

「な、なぁ　おれたちちゃんと　まおうじょうにむかってるよな？」

「だいじょうぶさ　このでんせつのほういばんが　まおうじょうのばしょを　しめしてくれるから」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「ふぅん　このあたりには　につかわしいモンスターだね」

バシッ！　ベキィッ！！

「ああッ！　でんせつのほういばんが！」

パアン！　メキッ！

「「えええええええええええええええええええええええええええええええ！？」」

かなりのパーティー　コスモスにしょうりした

第九十ゲル　無敵S　VS　伝説の英雄（笑）シューン　（ダークネスウォリ

「うぅ　おれの“邪眼オニキス”　がうずきやがる　…
…これはまおうがちかいあかしか　まっていろまおう　”海皇
剣リヴァイアサン”と”星煌剣フェンリル“　のさびにしてやる」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「おっとぉ　おれはザコにもようしゃしない　はでにち
れ“暗黒の堕ちた天使（ダークネスフォーリンエンジェル）”

バシィッ！

「ぐっあああああああ　みぎてのオーディンさえつかえれ
ばあああああああ！？」

でんせつのえいゆう　シューンにしょうりした

第九十一ゲル　無敵S　VS　包帯男ブレッド　1

「この道をずうっと歩くんだ。5日ほどで魔王城に辿り着けるだろう」

中年の男性はまるで見えない道の先を、枯木の枝のような指で指し示した。

「やれやれ、防衛ラインも随分とさがったものだ。以前はこの辺りも魔族領で訳のわからん建物が一杯あったってのに」

全身に包帯を巻く男は、中年の視線も気にせず言った。

「それも全ては勇者のお陰だろうさ。この辺り支配してた、なんとか言う化物をものの2日で倒しちまった。残ったのは不毛の土地と残骸だけだ。だぁれも近寄らねぇ」

魔族領の名残というヤツはいまも残っている。とはいえ殆どは魔族の異様な骸骨か、あとはなんらかのがらくた。建物を初めとしたものものは領主の魔力で構成されている、というのは事実らしかった。

「そうか。……ここまで案内ご苦労、約束の報酬だ」

「いいえ旦那、そいつは結構だ。おらはもうじきお迎えが来る、そんなもの貰っても使い道がねえや」

「そうか……では達者でな」

包帯男は手短に別れを告げると、一人荒れ地を歩いて行った。
その背中に、中年は手を振った。

「さようならだぁ、人間」

あれは、包帯男が案内人と別れてから、半刻後（約三十分）の事だった。

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「……お前かぁ。すっかり、お前に狂っちまったよ俺は」

スライムのこうげ……

「遅せえ！」

ズバッ！

“！！！！！！！！！！？”

スライムを　げきはした

「ふん。なあ、物陰のお前、残念だったな獲物が生きてて」

「気付いていたか」

現われたのは先程の中年男、破滅と怠惰をたたえた瞳は消え、餌を狩る狩人の目となった。

「いや、なんとなくだ。胡散臭いとは思ってたが、方向は大体あってたし疑う余地はなかった」

包帯男、ブレッドは武器を構えた。

第九十二ゲル　無敵ＳＶＳ魔王カルミンツァー（超魔王Ｌｖ．９９９９

ゆうしゃセインは　まおうじょうにちかづいている

「あとすこしで　まおうじょうだ　このままいければ
あといちにちほどか」

「セインは　もうすぐここにくる　わたしとけっちゃくを
つけるためにだ」

まおうのまで　カルミンツァーはまっていた

「ゆうしゃとまおう　まじわらぬかんけい　だれよりも、
どんなかんけいよりも　……だがヤツとわたしは　ひかれあっ
た　ひげきのヒロインでいたかったわけでない　のぞんだわけ
でもない　たまたま、そうなった」

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「たいせつにさせてもらうさ　ひととあくまの　ものがた
り」

カルミンツァーは　センテンスジューンをしようした

“！！！！！！？“

スライムは　けしとんだ

「わたしはまっているぞ　ひゃくねんも　せんねんもなぁ」

第九十三ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　超勇者セイン　（超勇者Ｌｖ．８６００）

ズバァッ！

“！！！！！！！！？”

スライムをげきはした

「はぁはぁ　どうやらついたようだ」

セインは　まおうじょうにたどりついた

「しかし　スライムしかいないというのは　どういうことだ？　ほかにせんりょくはないのか？」

”ようこそいらっしゃいました　まおうカルミンツァーさまは　おくでおまちです　どうぞおふたりきりの　ディナーをおたのしみください”

おんせいのみが　ひびきわたり　じょうもんがゆっくりひらいた

ガサッ……

モンスター　スライムがあらわれた

「ちっ　なにがふたりきりだ！」

セインは　まおうじょうをすすんでいった

第九十四ゲル　無敵S　VS　勇者セインと魔王カルミンツァー　1

ズバァッ！　ドスゥ！

”！！！！！！！！！？“

スライムをげきはした

「くそっ　つぎつぎと！　どこだカルミーさんは」

セインは　どんどんすすんでいる

しばらくすすみ　セインはとあるへやをみつけた

“魔王の間　カルミンツァー様のお部屋“

「……わな　じゃないよな　うん」

セインは　へやにふみいった

「あら　ゆうしゃセイン　ようやくついたのね　きてくれるとしんじてた」

「カルミーさん……」

「カルミンツァーよ　ゆうしゃセイン」

ガサッ……

モンスター　スライムもあらわれた

第九十五ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　勇者セインと魔王カルミンツァー　（超勇者Ｌ

「セイン、ようこそ我が城に。歓迎は出来ないが、まあ私の意図を汲み取って頂きたいな」

「いいや不要でよかったんだ、カルミーさん……」

“……！”

「おやおや私をまだその名で呼ぶか、案外未練がましいな勇者」

「あなたの本心が知りたいんだ、俺は！」

「本心？　本心もなにも、私は魔王で貴様は勇者、ただそれだけの事だろう」

カルミンツァーが一歩歩み出す。

「スライムが群れを成し俺の故郷を襲ったのもあなたの仕業か！？」

セインが言う。

「ほぅ？　覚えは無いのだがな」

「スライムは元来から群れ成すことない大人しい生き物だ。あれでは強力な兵器でしかない……悪魔四天王亡き今、そんな真似が出来るのはあなたをおいて他にないから」

「ふぅん、興味無い事柄だ。私はハナっから貴様にしか興味は無い……人間も、魔族ですらもどうでもいいのだ。魔王として、女としてお前と戦いどちらかが失せる。私にして見ればこれこそが全てであり、理由である」

「……要は、関係無いってことか……」

「さぁ、要らぬ討論はこれまで。剣を抜け勇者よ。存分に奪い陵辱し貫いて……堕ちよ！」

カルミンツァーが右手をかざす、と同時にセインの身体がはじかれた様にその場を跳んだ。ついさっきまでの足の位置が爆ぜ、消滅する。

”！！！！！！？“

スライムはしょうめつした

「やるな、ではこれは？」

続けざまに、右の手のひらからは火炎が、左の手のひらからは雷が顕現し襲い来る。

「未練がましいのはどっちだカルミーさん！」

セインの振るう剣は一本の銀線となり、魔術を払う。間合いは見る見る間に縮み、勇者の斬撃が魔王にはしる。が、切っ先は二本の細指に摘まれ、直後にはキィンと音をたてて折れた。

「どうやらとんだ安物を掴まされた様だな」

「業物だ。一度も手入れした事が無いだけの」

ガサッ……

スライムがあらわれた

「せめて、伝説の武器だとかを持って来るべきだったな！」

カルミンツァーの拳に魔力が集う。虹色の輝きに暫し目を眩まされながらも、セインは次撃を振るう。感触はなし、代わりにどの魔物に喰らった一撃より、邪龍に受けた一撃より遥かに重い拳を正面から受ける。

「ぐあああああああああああ！？」

遥か後方に飛ばされるセイン。途中、スライムを巻き込んだお陰で、叩き付けのダメージが軽減されたのがせめてもの救いだった。

“！！！！！！！？”

スライムはほうかいした

「何故だ、この期に及んで何故迷う？　私の知る貴様の剣撃はこんなものではない筈だ……まるで躊躇しているかのようだぞ」

セインは歯をギリリッ、と食い縛り立ち上がる。

「最初は、斬るのもやむ無しと思っていた……カルミーさんが、魔王カルミンツァーであったなら」

「何を言う。私は紛れもなく魔王カルミンツァーであるぞ」
「戦う理由が無くなった……その声も、その身体も、その顔も、その仕草も……全部、カルミーさんのままだから」
「……私は魔王だ、貴様は勇者だ！　それが理由ではないか！」
ガサッ……
モンスター　スライムがあらわれた
「それがッ！　それが未練がましいって言うんじゃないか！　それがあなたの本心なのか、俺にはどうしてもそう思えないんだ！　魔王だ勇者だなんて捨てればいい、それが戦う唯一の理由だと言うのなら、俺はそんなもの断ち切ってやる。あなただって魔王なんてもの捨てちまえばいいんじゃないですか！？」
「黙れ、勇者ァ！！」
「黙りません！　カルミーさん、魔王だとか勇者なんてくそ食らえだ、俺はあなたの事が……」
「黙れと言っている！」
カルミンツァーはデッドエンドコスモスを放った。強大な暗黒球がセインを塵も残さず貪らんと、一直に迫る。だが……
スライムのこうげ……

スライムは　うっかりこうげきの　しゃせんにはいった

”！！！！！！！？“

スライムは　やみにむさぼられた

「なんだと！？」

闇を割き、セインが飛び出した。もう、カルミンツァーの眼前にて、拳を振りかぶる！

「うおおおおぉおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

第九十六ゲル　無敵S　VS　勇者セインと魔王カルミンツァー2　（超重

「うおおおおぉおおおおおおお！」

セインは拳を振りかぶる。もう、回避もガードも間に合わないほど間近であった。

（しまっ……！？）

そのまま、振り抜くだけのセイン。が、彼はこの期に及んでも未だ……。

”セイン様、とおっしゃるのね。ふふふ、名前まであの人と一緒なのよ“

“私にはどうする事も出来ないけど、きっと明日も続くのね”

”セイン様にとって魔王は絶対的な悪なのですか？“

“あなたがやることで、誰かが癒やされるのでしょうか”

彼女の言葉は全て本物だったとするならば、そうして佇む彼女が本物だったとするならば……

「ッ！？」

「何故、だ……」

セインの一撃はピタリと、カルミンツァーの文字通り目と鼻の

先にて止まっていた。

「何故止めた勇者ァ！　あと僅かがどうして踏み出せない、簡単な事だろォォ！」

あと一歩、一歩分の思考が失せたなら、圧倒的たる魔王に一発をくれてやれた。魔王カルミンツァー……只の街娘であったカルミー……何が違うのだ、と。

「俺は……こんなときに、馬鹿だ」

拳が、停止した腕がだらりと垂れる。かと思いきや、ほどかれた手と共に最後の一歩を踏み出した。

「！？」

終わって見れば結局勇者は、魔王を腕の中へと引き寄せていた。呆気にとられた魔王、実にあっさりと勇者のプレートメイルに身を預ける格好となった。

「……何のつもりだ？」

「……えーと……す、好きです、魔王カルミンツァーさん……」

虫の羽音一つでもあれば掻き消えていたかもしれない声だった。鎧と衣服で密着していてもはっきりとは聞こえなかった。それでも、この奥手奥手な勇者は気のきいた言葉をすっ飛ばし言う。

「……だから？」

「も、もう止めましょう……あなたが、魔王であることを差し引いても、そのぅ、お釣りが来るんで、えっと……」

「勇者は国民と王と犠牲者皆の感情を背負い、魔王討伐に出掛けたのにか？　そんな自分が許したからいい、みたいな独善で魔王を生かす？　馬鹿げてるとは思わないの？」

「馬鹿げてますよ。独善なのも分かってます、けど……はは、こんな俺じゃあ勇者とはいえないでしょう？」

ああ、彼は勇者であることをやめたんだ。純粋に何を願うのか、それは多分そう言うことなんだろう。馬鹿だ、それもとびっきりの。

「馬鹿過ぎ……だが、私はそれも出来ない」

ドン、と押し返される勇者。攻撃のそれでないのはすぐに分かった。だけどほんの少し開いた隙間が、ずっと遠くに見えた。

「勇者セイン、最後の攻防だ。お前が死ぬか私が死ぬか二つに一つ、例外はない。助かりたければ私を終わらせろ……」

「待ってくれ、俺は……」

魔王の右手が鈍く輝く。この距離だ、損じることは有るまい。

「滅びろ、勇者ァァァァ！」

魔王カルミンツァーはエクセキューションフィストを使用した。

ガサッ……

モンスター　スライムがこのタイミングにあらわれた

第九十七ゲル　無敵S　VS　くうきをよまない人々

スライムの　こうげき

「!?　セイン!」

カルミンツァーはこうげきをやめ　セインのいちと　いれかわった

バシィッ!

「きゃあああああああああああああ!?」

「カルミンツァーさん!?　くそ　またおまえかぁ!」

バキッ!

”!!!!!!!!?“

スライムをげきはした

「カルミンツァーさん、大丈夫ですか!?」

「ぐぅ……どうして私は……いいや、嘘か。セイン、私はな、本当は馬鹿になりたかったのかもしれない。魔王、と勇者でさえ、最後の魔王らしさでさえ、本当はどうでも……」

「カルミンツァー!……やっぱりあなたはカルミーさんだ!どうしても、どうしても切り離せなかった」

「……私もさ。本当は……」

バァン！

とびらがくだけ　スライムのたいぐんがあらわれた

「……セイン、魔王の願いで恐縮だが、私を置き去りにするか最後まで闘うか、この場で決めて欲しい……もう私も馬鹿になってやろう」

「分かってなかったんですか？　あなたを守ります、最後が来ても一緒にいます、出来れば結婚……」

ヒュッ！

スライムのくうきをよまないこうげき

「うぉっ！？　これからって時に！」

「後にしよう。無論、続きは聞かせてくれるんだろう？」

「ええ！」

セインのこうげき

バキッ！　ドカッ！

“！！！！！！！？”

スライムをげきはした

「私も、寝ている訳にはいかんなぁ！」

カルミンツァーは　ディメンジョンホールをしようした

スライムは　いじげんのあなに　のみこまれた

“！！”

スライムのこうげき

ベチィ！

「がぁ……まだまだぁ！」

バゴォ！　ベキッ！

「はァァァァァァ！」

”！？“

「はぁ、はっ……無事ですか、カルミーさん？」

「ああ。だが魔力が尽きかけだ、そろそろマズイかもな。……にしても」

ガサッ、ガサッ……

スライムの　ぞうえんがあらわれた

「減らんな、こいつら」

「そう、ですね」

「セイン、どうせだ。さっきの続きを頼む」

「……遺言ではありません。そうでしょう？」

「ああ」

「では……カルミーさん、魔王と勇者でも関係ないです」

スライムのこうげき

「こんな俺とで良ければ、けっこ……」

「ウオオオオオオオォ！」

ズバッ！

“！！！！！！？”

スライムをげきはした

「お前ら、よく生き延びた！　後は俺様に任せて貰おう！」

全身包帯の男が現れた。

「えぇと……あ、あなたは？」

「ただの名も無きスライム狩りの男だ。決して怪しい者ではない！」

と、名も無きスライム狩りの男ブレッドは言った。

「いや、助かりはしましたけれど……」

「さぁ、スライム共……長い付き合いだ、一緒に踊ろうかぁぁ！」

ブレッドは攻撃を開始した。荒々しい濁流のごとき斬撃は、スライムの動き始める前に一発、確実に切り裂いた。一匹、また一匹と粘液に還ってゆく。力強い異国の乱舞を見ているかのようだった。

「す、凄い……なんて動きだ」

「ああ。あの男、相当にタフな人生を生きてきたのだろうな」

ズドッ！

”！！！！！！？“

スライムはほうかいした

「どうしたどうしたぁ！　終わりかスライム共！」

バゴォ！

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああ！？」

ブレッドに　しょうりした

「「えええええええぇ！？」」

正に油断大敵、奢るべからず。あれだけ優勢だった包帯男はたったの一撃にて轟沈した。

「……カルミーさん」

「なんだ、セイン」

「今度こそ言います」

「そうしてくれ」

「カルミーさん、俺とけっこんし……」

バァン！

しかし　壁が砕けた。

「「「リーダー（おっちゃん）！！」」」

くうきをよまないパーティー昇龍のメンバーが現れた。

「「「セイン（セイン様）（セイーン）！！」」」

くうきをよまない勇者パーティーのメンバーが現れた。

「はは……は……」

セインは笑うしかなかった。

第九十八ゲル　無敵S　VS　勇者昇龍連合パーティー

「ったく、リーダー！　病院勝手に抜け出しやがって何考えてんだ！」

「本当ですよ。本来なら後一、二ヶ月は安静なんです！」

「おっちゃんももういいおっちゃんなんだから無理しちゃダいメでしょおっちゃん！」

「……スマン、どうしてもスライムが倒したかったんだ……ガッ」

「セイーン、今度という今度は許さないよー、せめて一言言ってくれれば良かったじゃーん！」

「本当ですセイン様、私達がどれ程心配したか！」

「俺達はパーティーなんだ。そこんとこ覚えていて欲しかったよなぁ」

「皆……ごめん、もうしないから」

「まっ、お互いに探しものは見つかったんだしよぉ」

「だなぁ、俺の手も大分鈍ってたとこだし？」

剣士と超戦士は意気投合しているようで、互いに力をためてゆく。

「あ、あの、ドライヴ様……力ずくというのはあまり……」

「全くです。こいつらは只のスライムではないのですよ」

賢者と救世者は慎重な判断を求める。

「フンフンフーン、適当なタイミングでぶっぱなすから避けなさいよ！」

「エネルギーチャージー、さいこーのいくからねー」

炎魔法使いと超魔導師は必殺の一撃の準備を進める。

いつもの、いつも通りのパーティーの光景だった。

「そうか……これが、人間のパーティーなのだな」

「ええ。これが俺達勇者パーティーなんですよ」

魔王と勇者は回復を待っている。

「ところでー、セインの隣にいるあんたー」

超魔導師ファルが、カルミンツァーに言う。話しながらも術式は確実に織り込まれてゆくのはさすがの一言だ。

「魔王カルミンツァーだ、小娘」

「名前なんてどうでもいいー、随分セインと仲良さそうだねー魔王のクセにー」

「あ、ファル、この人はもう……」

「私とセインは仲良しなのさ。察しろ小娘」

「後で詳しく話し合う必要があるよねー、完熟魔王さんー」

「か、完熟！？」

「下らんなエレス平原小娘」

「へ、平原！？　二人共どうし……」

「「ふふふ

第九十九ゲル　無敵Ｓ　ＶＳ　勇者昇竜連合パーティー　２

「「いっくぜオラァァ！」」

ドライヴとノールは同時に飛び出した。眼前には二匹のスライム。先制はドライヴだ。

「フォトンブローォォ！」

ドンッ！

スライムをげききはした

「アートスラァァッシュ！」

ヒュッ

スライムは攻撃を回避した。

「げっ……」

「ノール、伏せろ！」

賢者クロルはライトレイズを使用した。レーザー状の光が、スライムを焦がす。その間にもノールは体勢を立て直し、今度こそは一撃を叩き込む。水を切り裂くように、あっさりと真っ二つとなり崩壊した。

「おいっ、こいつら防御能力は大したことないぞ！」

「この調子でガンガンいきましょう！」

「致し方ありませんが、参ります！　　エスクルドビージ」

発光、終息。ただのその二行程だけであったが、スライムらは途端に動きを止めた。救世者の前に、ありもしない膝を折る。

“なんだこれ”

”からだがうごかない“

“なにをされたの？”

スライムの声が聞こえる。彼らとは精神の奥底で繋がり、行動を制限しているのだ。これこそが救世者の真骨頂たる能力であった。

「み、皆さん、早く魔法の効果範囲外へ……私がスライム達を押さえている間に。彼女は、ファルさんは手加減が効きません」

「了解だぜ、因みにウチのフェイも加減は出来ねぇ」

精一杯走り離脱するのはいつものこと、剣士とは戦士とは、魔力の起こす奇跡までの時間稼ぎも兼ねるものである。

「んじゃぁ行くよ、フレイムテンペスト！」

「怒りのーバーニンメテオー」

隕石、そして炎の竜巻が法則を無視し奇跡として顕現する。瞬

く間にスライムの群れを飲み込んで破壊の限りを尽くした。

”！！！！！！？“

スライムの数を大幅に減らした。

「よし、この調子なら……」

「貴様らぁ、やってくれたな」

その時、声が響いた。年老いた男の様なしゃがれ声にカルミンツァーは思わず言う。

「ドクトル？　ドクトルなのか？」

ガサッ……

モンスター　ドクトルがあらわれた

「如何にも。カルミンツァー様まだ生きておいででしたか、さすがは腐っても魔王ですなぁ」

「その物言い……この騒ぎはお前の仕業、という訳か？」

「むぅ、やはりスライムベースでは防御能力に不安がありますな。オリジナルは上手く出来たのですがねぇ……やはり完成までは更なる日時が必要でありましょう」

「質問に答えよ、魔界科学者ドクトル！」

「小うるさい小娘よ。カルミンツァー？　ははっ、魔王？　愚かしい……そもそもお前が魔王などと反対でしたのに。まぁ、いいデータは取れましたし、ここいらであなた方には退場を願いましょう。スライムよ！」

ドクトルの合図と共に、どこに隠れていたのか、スライムの大群が現れるとドクトル目掛け突進した。

「ふふふふハハハハハハ、見るがいい、これこそが私の研究成果だ！」

「スライムと……合体しているのか……」

“ハハハハハハ素晴らしい、素晴らしい力だ！”

モンスター　アーマードドクトルがあらわれた

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2004x/

無敵スライム

2012年1月8日18時53分発行